

秦漢帝国北方辺境の歴史空間

黄 曉 芬

大学院 総合学術研究科 人間科学専攻
xiaofen@toua-u.ac.jp

はじめに

黄河の中・上流域が大きく曲がり、その川筋に囲まれた地域を中国語で「河套（フトォ）」と通称する。この広大な河套地域は、古くから中原の農耕民と北方遊牧民の衝突と融合を繰り返す舞台であった。そこで一体、どんなドラマがあり、どのように展開していったかを、従来の文献、考

古学資料をもとに、近年、漢魏都城・陵墓の総合的研究科研費（基盤B代表者：黄「先端技術を用いた中国内蒙古・新疆北部における漢魏都城・陵墓の総合的研究」（課題番号：20401037）による内蒙古陰山南麓の遺跡フィールド〔図1〕で得られた新知見をふまえて考察し、秦漢時代の北方辺境における壮大な歴史空間の復元を試みる。



図1. 内蒙古西部の調査地点

I. 内蒙古西部の自然と歴史沿革

内蒙古のオルドス高原から陰山南麓一帯に流れる黄河の中・上流域には、先行河川が発達し、袋状の弧を描きながら蛇行を繰り返している〔図2〕。そのまわりに、広大な河谷平野が形成され、豊かな農耕地が広がっており、一般に河套平原と呼ばれる〔写真1〕。広義の河套平原は、黄土高原以北からモンゴル高原の南縁に及ぶ。狭義の概念では、内蒙古西部、陰山南麓の呼和浩特（フフホト）平原（前套）から西のバインノール市（旧巴彦淖爾盟）、烏海一帯（後套）を指す。

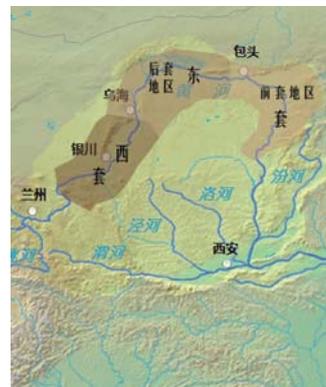


図2. 河套平原の地理位置

本稿は、2012年12月8日に東京大学で行われた東洋史研究集会（科研費基盤B〈代表：佐川英治〉「最新の考古調査および礼制研究の成果を用いた中国古代都城史の新研究」）における講演資料である。



写真1. 黄河と陰山



写真2. 陰山南麓の河谷平野

河套平原の北部には東西に連なる陰山山脈が聳えており、陰山の北側は広大な達爾罕（ダルカン）草原やゴビ砂漠で、山南には河谷平野が広がっている〔写真2〕。陰山南北の気候や自然、地理環境の違いによって文化の差異も大きい。〔侯仁之・兪1973〕現在、河套平原の大部分は乾燥なゴビ砂漠、草原となっているが、2000年ほど前のこの一帯は郡県都市、城塞が点在し、灌漑農業が盛んに営まれ、豊かな穀倉地帯であった。

『史記』匈奴列伝には、春秋期の秦穆公の時「晋北有林胡，楼煩之戎。」と記され、紀元前6世紀頃、北戎の林胡，楼煩がかつて陰山南麓，河套平原一帯に遊牧生活を営んでいた。『史記』楽毅列伝にも戦国の燕昭王元年（B.C. 312）「匈奴驅馳於楼煩之下。」との記述があり、北方匈奴が戦国期に陰山南北の地に進出ししていたことがわかる。

「冠帯戦国七，而三国辺於匈奴。」

—『史記』匈奴列伝

戦国期には趙・燕・秦の三大国が内蒙古陰山南麓，河套平原の地に隣接し，中原農耕民と北方遊牧民との戦いが繰り返していた。

「趙武靈王亦変俗胡服，習騎射，北破林胡，楼煩。築長城，自代併陰山下，至高闕為塞，而置雲中，雁門，代郡。」

—『史記』匈奴列伝

趙の武靈王（B.C. 325-299）が数回の北征を通して陰山南麓で林胡，楼煩を破り，趙国の勢力を初めて陰山西段の大青山，烏拉山，狼山（陽山）南麓まで伸ばし，趙国が率先して長城や城塞を造り，敕勒川（フフホト平原）に雲中郡を設置した。『史記』秦始皇本紀には，始皇帝三十三年（B.C.214），「又使蒙恬渡河，取高闕，陽山，北假中，築亭障，以遂戎人。」とあり，大將軍蒙恬が10万の兵士を率いて河套地域の匈奴を追い出して雲中，九原二郡を編成し，中原から3万戸を河套平原に移住させ，陰山北麓の長城，亭障城塞を築造し，北方国境線の防御整備を強めた。秦末の戦乱で北方匈奴は再び河套平原へ大規模に侵入し，前漢前期まで占領していた。

漢代の武帝期に，蒙恬が築造された秦長城，城塞を修繕・利用する一方，元朔二年（B.C. 127）武帝は衛青を雲中に派遣し，匈奴を敗退させふたたび河套平原を奪還し，河套平原に「五原郡，秦九原郡，武帝元朔二年更名。」（『漢書』地理志）とあるように，秦の九原郡を五原郡と朔方郡に編成した。朔方郡は，現バインノール市臨河区（旧巴彥綽爾盟臨河市），磴口県にあり，五原郡は，包頭市付近にあった。これら河套平原における漢の郡県都市は，秦の雲中郡，定襄郡や上郡（オールドスー帯）の北部を含んだ新たな郡県都市の造営と開発が急速に推進された。大量の中原農耕民がこの河套平原一帯に移住させられ，そこは屯田や馬の繁殖地として開発され，北方匈奴と拮抗する基地が営まれていた。

「遣光禄勳徐自為築五原，塞外列城，…。秋，匈奴入定襄，雲中，殺略数千人，行壊光禄諸亭障。」

—『漢書』武帝紀

陰山南北へ頻繁に侵入してきた匈奴との攻防戦に備えるため，漢の太初三年（B.C. 102），武帝は光禄勳徐自為を派遣し，五原郡城を造営し，陰山北麓の草原丘陵地帯で北方辺境の長城，亭障城塞，烽火台の数々＝「塞外列城」を築き，北方国境線の防備施設を強化した。文献にある「諸亭障」，「塞外亭障」とは，秦漢時代の北方辺境で造られ

た長城と、それに付設する城塞など防御施設を意味すると考える。このように、河套平原の人々は、堅固な北方長城に守られ、黄河の水利開発で灌漑農業を拡大した。水路交通の利用もあって、河套地域の経済繁栄と発展がもたらされた。2000年以上の歳月が経過した今でも、当時の郡県都市や長城、亭障・城塞、烽火台遺跡が陰山南北の草原丘陵、河套平原の河谷段丘の所々に残り、秦漢北方国境線の歴史景観を眺望することができる。

II. 古代中国の北方国境線とその展開

広大な河套平野に立ち聳える陰山は、古来中原農耕民と北方遊牧民との衝突に対する天然の攻防障壁となり、陰山山脈の大河谷は、陰山南北を往来する異民族間の交流・交通の要道を成していた〔魏堅2006〕。古代中国における長城、亭障城塞の

大規模な築造は、戦国期に始まり、秦漢時代に整備・拡張され、北方国境線の防御施設として一層強化されてきた〔図3〕。

1. 開創期—戦国時代

〔長城、烽火台〕戦国期の趙国長城は、代（現河北省蔚県）に始まり、洋河に沿って内蒙古興和県、陰山南麓に至り、フフホト平原から西の河套平原へ、フフホト市〔写真3〕、土黙特左右旗、包頭市、巴彥綽爾盟（現バインノール市）烏拉特前旗の大青山南麓を経て、烏拉特後旗の狼山（陽山）南麓の達巴図溝西側まで延びる。趙国の長城は基本的に版築土で構築したもので、城壁幅は4（底）～2.5（頂）m、残存の高さ約2mである〔写真4〕。城壁両側や基底に砂利や石材で補強した箇所が一部見られる。

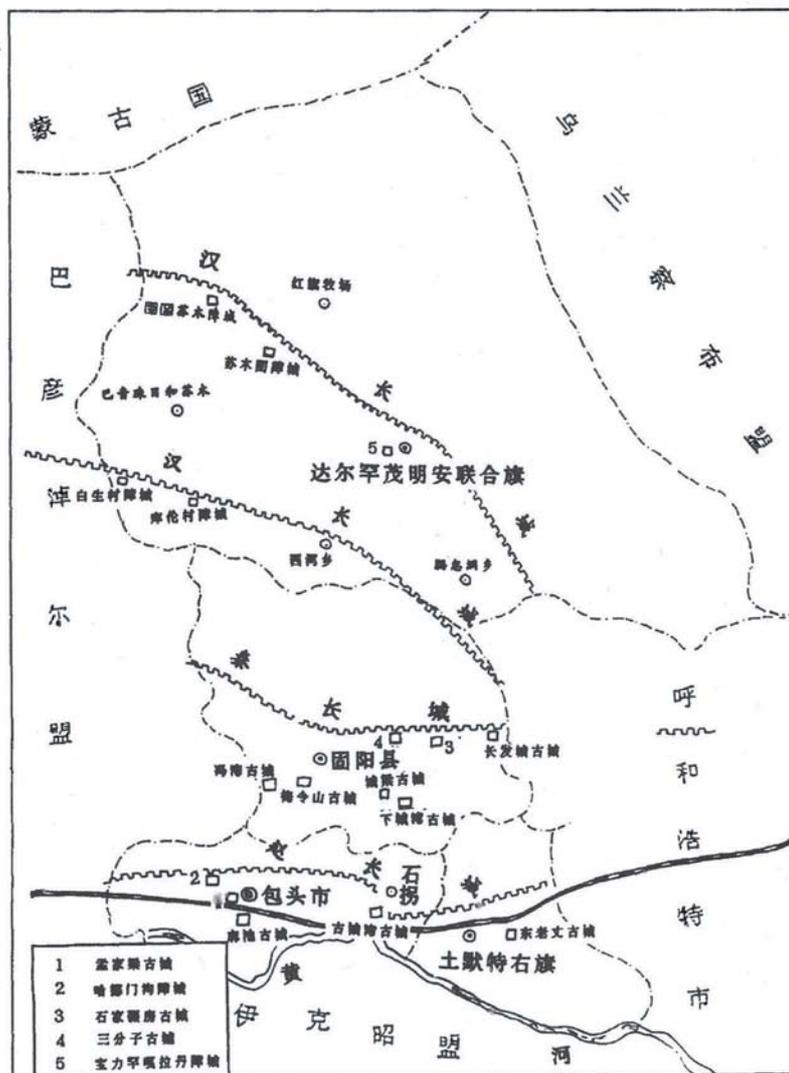


図3. 陰山南北の長城、城塞遺跡の位置図〔包頭市文管処2000〕



写真3. 陰山南麓の趙長城



写真4. 趙長城の版築構造

また、有事時の情報伝達措置として烽火台が長城付近に点在する〔図4〕。

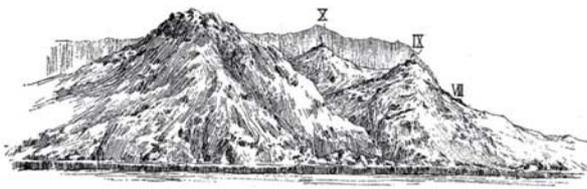
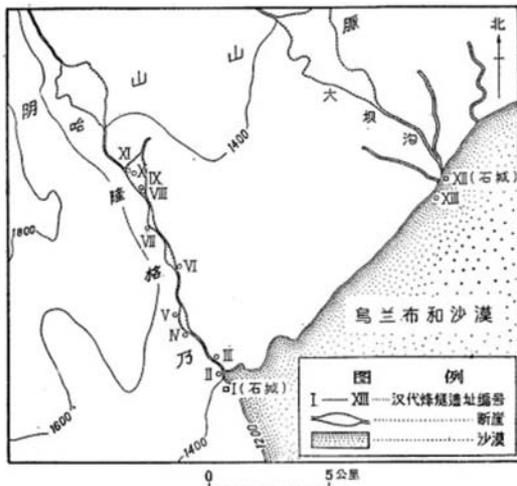


図4. 陰山南麓の長城・亭障・烽火台〔侯・兪1973〕

〔亭障・城塞〕長城に付設する防御施設で、版築土や石材で構築した方形城郭が一般的である。包頭市境域を横断した趙の長城と、長城付近に遺された亭障城塞が十数ヵ所あり〔包頭市文管処2000〕：

- ・包頭市石拐区後渠遺跡：東西92×南北95mの方形城塞で、東城壁は長城の一部を利用し、西城壁には門幅10mの亭障城門がある。
- ・包頭市崑都崙溝遺跡：崑都崙河南の段丘にある一辺約70mの方形城塞で、版築城壁の底幅が約6m、南城壁中央に幅6mの城門がある。
- ・包頭市西郊哈德門溝遺跡：東西213×南北203mの方形城塞，方位2度。版築城壁の残存高1～5m，城壁幅8（底）～3（頂）m。城北中央の台地に東西37×南北43mの小城が残り，磚瓦や瓦当建材が散乱している。
- ・包頭市烏拉山梅力更溝南遺跡：一辺65mの方形城塞で，方位8度，城壁幅15（底）～4（頂）m，残存高3.5m，北壁の中部に烽火台が1基あり，城内に磚瓦や陶器，半兩錢が出土した。
- ・巴彥綽爾市烏拉特後旗達巴図溝遺跡：狼山南麓の河谷段丘を利用した築城〔張海斌2000〕で，溝口両側に聳え立つ山峰は，高大な門闕を彷彿とさせ，「高關塞」とも呼ばれる〔写真5〕。これは南北に接続した2つの積石城塞で〔写真6〕，城壁の実測や採集遺物の状況からみると，建造時期の異なるものである〔写真7〕。北城（南北長28.63m，東西幅26.34m，方位26度10.15分西偏）の城門や石造の建築址が残り，築造時期は南城より古いと考えられる。



写真5. 陰山と石積みの城壁



写真 6. 城塞の立地と景観



写真 9. 鶏鹿塞内の建築址



写真 7. 高関塞遺跡の全景



写真10. 鶏鹿塞の甕城門

・巴彥綽爾市磴口県鶏鹿塞： 磴口県沙金套海蘇木の西北，陽山（狼山）哈隆格乃溝口の段丘に礫石で積み上げた方形城塞〔写真 8〕で，東西 60m，南北 61m，方位 9 度 26.17 分西偏である。城壁の幅は 5.3m（底）～3 - 4 m（頂），残存高は 3～5m〔写真 9〕。城壁の四隅に外突した角台があり，南城壁に門道幅 3 m の城門とそれを囲む方形の甕城〔写真 10〕があり，城北西に趙長城の一部が残存している。



写真 8. 鶏鹿塞の立地

2. 強化期—秦代

始皇帝三十三年（B.C. 214），戦国期の趙・燕・秦三国の長城を連結させて修繕し，陰山南北の山地沿いに東西方向へ延長・増築し，これが中国万里長城の基本となった。

〔長城，烽火台〕 内蒙古フフホト市から西へ包頭市固陽県を経て巴彥綽爾市（バインノール）烏拉特前旗一帯に延びる。陰山北麓の自然地形や段丘台地の高低差を利用した築造で，版築土造りが主流で，山崗台地には積石造りが見られる。城壁の底部幅 4～5 m，頂上 2.5m，残存高 3～6 m，長城沿線の内側 15～50m に方丘形の烽火台（一辺 4～9m）が約 1～2 km の間隔で点在する〔包頭市文管処 2000〕。

〔亭障・城塞〕 長城の付近に建造され，長城の一部利用がある〔包頭市文管処 2000〕。

・包頭市固陽県大廟郷長發城村遺跡： 東西 150×南北 100 の方形城塞で，方位 4 度。版築土の城壁幅 14（底）～3（頂）m，残存高 1.5m，

北城壁は秦長城の一部を利用する。城内の東北隅に小城（東西60×70m）を設け、南壁中部に幅10mの城門があり、まわりに雲文瓦当や縄文を施した秦漢の磚瓦建材、陶片が多量に散乱している。

- ・包頭市固陽県銀号郷三分子村遺跡：河谷段丘に築いた東西200×南北150mの方形城塞，方位4度。北城壁は秦長城の一部利用で，ほかは版築土の城壁幅15（底）～3.5（頂）m，残存高1.5m。城内の西北に小城（東西70×50m）があり，建築址の付近に多量の磚瓦建材が散乱している。

3. 拡張期—漢代

〔長城，烽火台〕漢長城は陰山北麓に建造され，東の武川県から西へ固陽県，達茂旗，烏拉特中・後旗に至る全長約400km。達茂旗宝力格蘇木，固陽県境内の丘陵ゴビ地帯に延びる漢の長城遺跡〔写真11〕は，南北に分かれた2基の長城が築かれ，南北間の距離は30～45km，内，外二重の長城がほぼ並行して築かれ，外敵への備えは万全である。

漢の南線長城は，版築土の長城底部幅は4～6m，残存高1m。板石積みの長城幅は3.5m（底）～2m（頂），高さ2.2～2.3mあり，方丘の烽火台が長城の内側に点在する。漢の北線長城は，呼倫陶勒蓋一帯に残る城壁の底部幅が2.3～2.4m，頂上幅約2m，残存高1.1mある。版築土や石積みの烽火台が長城の内側に30～150m離れる丘陵山頂地帯によく残る。



写真11. 漢の長城遺跡



写真12. 漢代の亭障・城塞趾

〔亭障・城塞〕漢の長城付近に一定の間隔で造られ，文献に曰く「塞外列城」である〔写真12〕。

- ・包頭市達茂旗蘇木凶遺跡：陰山北麓の小山丘頂上にあり，漢の北線長城に付設する方形城塞で，東西約38m，南北50m，版築城壁の残存高3.2mである。
- ・包頭市達茂旗庫倫村遺跡：宝力格蘇木草原地帯の庫倫村南にあり，漢の南線長城に付設する方形城塞（140×128m）で，方位10度，版築城壁の底部幅12m，高さ約4m，南・北城壁に幅7mの城門がある。

そのほか，達茂旗宝力格蘇木の南線長城沿いに一辺17m四方の小城塞が点在する。

以上のように，陰山北麓に築造された漢の南・北線長城や亭障・城塞は，王莽政権以降，徐々に衰退し，やがて陰山南北の山地に延びる秦長城を利用するようになった。

Ⅲ. 陰山南麓の郡県都市

戦国趙の武靈王二十六年（B.C. 300）数回北征した趙の武靈王が陰山南麓で林胡，楼煩を敗退させ，勢力を陰山西段の大青山，狼山南麓一帯に伸ばしたが，郡県都市の造営については記述がない。ただし『水経注』「河水」には「秦始皇置九原郡，治此。」とあり，河套地区における「九原郡」の設置は秦代に始まり，漢の武帝元朔二年（B.C. 127）に「五原郡，九原郡，武帝元朔二年更名。」（『漢書』地理志）と記されている。また「遣將軍衛青，李息出雲中，至高闕，遂西至符離，獲首虜数千級。集河南地，置朔方，五原郡」（『漢書』武帝紀）ともある。

1. 九原郡・五原郡（県）城址

秦の九原郡の建造地については、未だに定説がないが、諸論考の中に巴彥綽爾市烏拉特前旗黒柳子郷の三頂帳房古城を九原郡城と見るのが主流で

〔張郁1997, 李逸友1992〕, 現包頭市九原区に残る麻池古城を秦の九原郡〔李紹欽1980〕, 漢の五原郡と推測する意見もある〔図5〕。

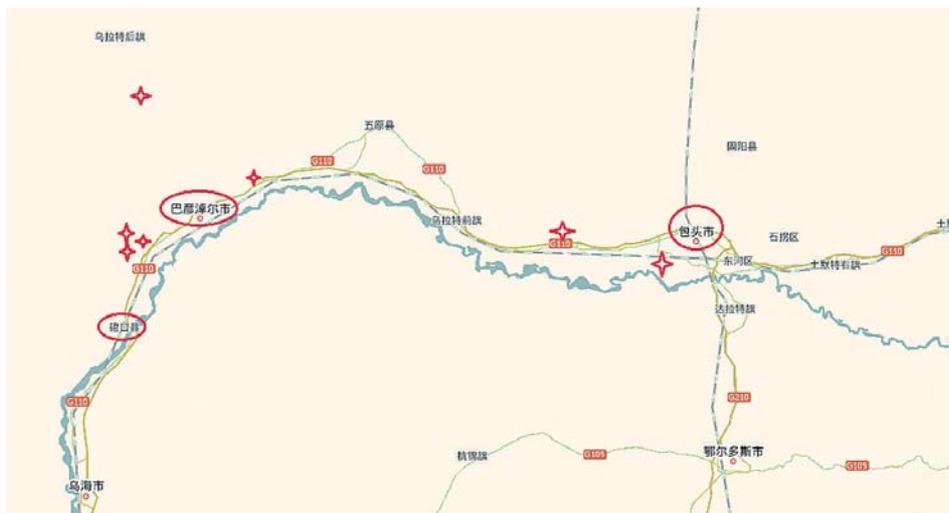


図5. 秦漢郡県城址の位置図



写真13. 三頂帳房古城

〔三頂帳房古城〕 烏拉特前旗黒柳子郷三頂帳房村にあり, 黄河以北10km, 烏拉山南麓から3kmにある。従来の調査資料によれば, 東西長1200×南北幅1000mの方形城郭で, 筆者らが昨年夏に行った実地調査でGPS測量した結果, 東西壁590m×南北620mの方形城郭, 方位3度42分である〔写真13〕。

城内の東南, 西南に基壇建築址が残り, まわりに多量の磚瓦建材が散乱し, 銅鏃, 鉄鼎の残片が採集された。古城東2kmのところにも大型墳丘をもつ墓地があり, そこに半兩, 五銖銭や銅鏃, 「長楽未央」を施した銘文磚などが見つかった。

よって, 三頂帳房古城は秦の九原郡, 漢の五原郡城, または五原郡下の属城と推測されている。

〔麻池古城〕 包頭市九原区麻池郷城梁村北500mにあり, 黄河以北8km。南, 北に連なる2つの方形城郭からなり〔図6〕〔写真14〕, 北城の北壁, 南城の南壁中央に城門がある。実測では南城: 東西580m×南北649m, 方位6度41分。版築城壁の幅約4m, 残存高2~4m〔写真15〕。北城: 西南隅角はやや不規則で東西720m×南北690m。城壁幅9~5m, 高約5mである。



図6. 包頭市麻池古城の平面図



写真14. 麻池古城の城壁

北城の南部中央に大型の版築基壇が3基あり、建築址付近で「大吉利」残磚や「万石」と刻まれた木質印章および「安陽」布幣、刀幣などの戦国貨幣40点余りが出土した。それによって、北城の建造時期は南城より古く、北城は秦の九原郡で、南城は漢の五原郡、五原県城と主張する意見がある。一方、麻池古城〔写真16〕の東、西、北方に墓地が集中し、そこからは100基以上の漢代槨墓と磚室墓が発掘された。



写真15. 麻池古城の南城



写真16. 麻池古城内の遺跡

『水経注』「河水」には、「(黄河)又東，逕九原県故城南。秦始皇置九原郡，治此。漢武帝元朔二年（B.C. 127）更名五原也。王莽之獲降郡成平県矣。西北接对一城，盖五原県之故城也，王莽之填河亭也。」との記述がある。麻池古城は南北に連なる2つの城郭からなり、ここに記述された秦の九原郡と漢の五原郡（王莽期に五原県を降格した）の位置に該当する。

2. 漢代朔方郡

文献記載によれば、漢の武帝元朔二年（B.C. 127）に「…集河南地，置朔方，五原郡。」（『漢書』武帝紀）とあり、河套平原一帯を朔方郡と五原郡に編制した〔図7〕。

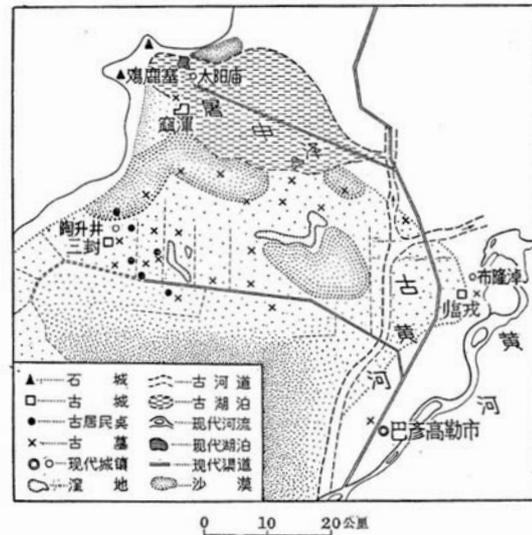


図7.漢代朔方郡の位置図

『漢書』地理志の記述によれば、朔方郡は、黄河兩岸の10県を管轄し、黄河東側（現オルドス一帯）には朔方，修都，呼道，広牧，渠搜の5県と、黄河西側（巴彦綽爾市臨河区）には三封，麻池，臨戎，沃野，臨河の5県〔張郁1997〕があり、人口は13万6000余りであった。

〔三封古城〕巴彦綽爾市磴口県哈騰套海蘇木陶昇井村にあり、「陶昇井古城」「麻弥図廟古城」とも呼ぶ。内，外城からなり、現存する内城は一辺118m四方の城郭で、版築城壁の底部幅6.5m，残存高0.5～2m，南城壁中央に城門と南門闕がよく残されている。外城の城壁はほとんど破壊された

が、一辺の残長500m以上である。城内から雲紋の瓦当や排水管、陶盆、壺や鉄器、銅鏃、五銖銭などの出土があり、城東部には漢墓群がある。漢代朔方郡の早期郡城にあたり、朔方郡属の三封県城と推測される。

〔**臨戎古城**〕巴彥綽爾市磴口県の沙金套海蘇木土城村にあり、「沙金套海古城」と呼ぶ。古城の西北隅は屈曲しているが、東西長250m、南北幅200m、版築城壁の底部幅9～13m、残存高0.5～1.5mある、南城壁中央やや西寄りに城門（甕城）がある〔写真17〕。城内西南に冶鉄遺跡、西部に住居址や瓦の窯遺跡が見つかり、古城周囲に大小2500基余りの漢墓群が残る。漢の朔方郡属の臨戎県城と推測されている。



写真17. 臨戎県城の城壁

〔**臨戎古城**〕巴彥綽爾市磴口県河拐子村西北にあり、「河拐子古城」と通称する。東西450m×南北670mの方形城郭、方位2度、ほぼ真北方位の築城である。南城壁の中央に城門がある。版築城壁の底幅は約10m、残存高0.5～2mである。古城の西、北壁外側には、大小の墳丘をもつ墳墓群が烏蘭布和沙丘に密集している〔写真18〕。これまで盗掘など破壊された墓例をみると、漢代の槨墓、磚室墓が主流である。漢の朔方郡属の臨戎県城と推定される。後漢期に羌、鮮卑、北匈奴など朔方郡への侵入によって国力が弱まり、朔方郡の黄河西5県が撤去され、臨戎、三封、沃野3県を黄河東の県と合併し、朔方郡城を臨戎県に遷した。そして、2世紀中葉、南匈奴の河套平原への侵入より、朔方郡やその郡属各県も廃棄された。



写真18. 臨戎城外の漢墓

Ⅳ. 北方辺境の開発と交通

河套平原は黄河の上・中流域にあり、陰山山地とオルドス高原の間に標高の高い平野が広がる。山脈の南が標高1500mと高く、北が標高約1000mと低くなっているが、その間に広がる河套平原は、黄河やその支流が縦横に流れ、灌漑農耕に適した地域である。

1. 河套平原の屯田と黄河の水利開発

漢の武帝時代に朔方郡と五原郡が編成された。そして、塞外長城、亭障列城が築造されると共に、河套平原における黄河水利の開発、現烏蘭布和沙漠の東北一帯に大規模な屯田が行われていた。

「上郡、朔方、西河、河西開田官、塞卒六十万戌之。」
—『史記』平准書

1) 漢代集落と墓地—溝心廟遺跡

巴彥綽爾市磴口県哈騰套海溝心廟一帯、および漢の朔方郡三封古城と臨戎古城の間に見られる。黄河旧河道の河谷段丘に大小の住居址が密集しており、井戸や陶窯遺跡などが残されている〔写真19〕。この大集落遺跡のまわりに、中小規模の墳丘をもつ墳墓が密集し、「溝心廟漢墓群」と呼ばれる。現在も、崩れかけた土饅頭のような墓塚が多々あり、破壊された磚室墓のまわりに漢代の磚瓦建材が大量に散乱している。これほど大規模な集落と墓地は、漢代の北方軍備、ならびに物資提供のための屯田・生産基地として見てとれる。



写真19. 漢代の集落と墓地



写真20. 張連喜店遺跡の土塁

2) 「張連喜店古城」の実態を探る

「張連喜店古城」と呼ばれる遺跡は、大青山南麓の巴彥綽爾市烏拉特前旗磬亥郷張連喜店村にある。従来の見解によれば、東西280×南北250mの方形城郭で、東城壁中央に甕城があり、版築城壁の底部幅12m、残存高1～6mで、城壁外側約40mのところ、もう一重の城壁があったという。遺跡から三稜式銅鏃、灰陶罐や五銖銭などが採集されたことで、戦国期の城塞と見なし「張連喜店古城」と名付けられた〔辛徳勇2005他〕。

2011年夏、筆者は包頭市文物局や地元の考古学者の案内で実地調査を行った。北城壁と東城壁と思われる遺構がよく残されていた。通常、築城は壁一重で築かれたものだが、ここは二重壁造りで、その内、外城壁の間に10～40mの凹んだ地形がある〔写真20〕。城壁の断面を観察すると、秦漢時代の版築工法が認められず、単純な土塁としか考えられない。また、この古城東北隅の城壁は直角にならず、弧を描いて曲がり東南方向へ斜めに延びており、古城の東南角らしい遺構が見当たらない。烏拉特前旗文管所胡所長の話によれば、これ

までの調査では、ここ南・西城壁の痕跡が未だに確認されていないという。この遺跡状況をみると、従来の方形城郭として一周に囲まれていないことになる。したがって、これを「張連喜店古城」と呼ぶには、多くの疑問が残る。烏拉特前旗張連喜店村一帯は大青山南麓に分流していた黄河の「北河」と「南河」に近い。張連喜店村に遺された二重の土塁は、城壁として考えるより、二重堤防と見る方がより理解し易い。すなわち、2000年ほど前に耕地を潤す黄河の灌漑水路として開発されたものであると考える。

2. 秦直道

秦の始皇帝時代の国家プロジェクトとして創設された東洋最古のハイウエーである〔写真21〕。現陝西省と内蒙古とのふたつの省区に跨り、南端の帝都の儀礼空間・甘泉宮からオルドス砂漠を通して北端の内蒙古包頭九原郡に至る南北幹線道路を指す〔図8〕。



写真21. 陝西省の秦直道

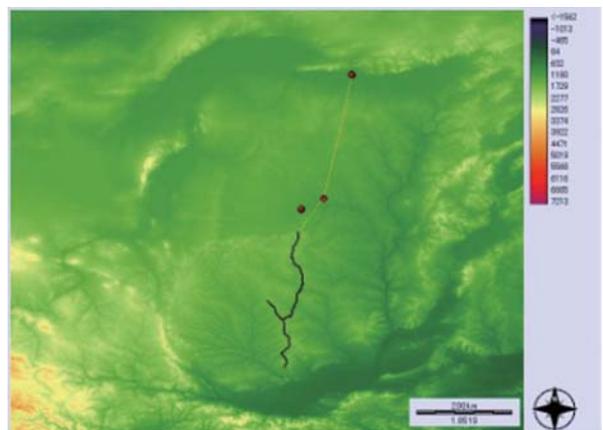


図8. 秦直道の全景図



写真22. オルドス秦直道

司馬遷の『史記』に「始皇帝欲遊天下，道九原，直抵甘泉，乃使蒙恬通道，自九原抵甘泉，塹山堙谷，千八百里，道未就。」（『史記』蒙恬列伝）とあり、『漢書』武帝紀に「（武帝）元封元年冬十月，…行自雲陽，北歷上郡，西河，五原…。勒兵十八万騎，旌旗径千余里，威震匈奴。…還，祠黄帝於橋山，乃歸甘泉。」との記述がある。北方有事の際，出征部隊の車騎や物資運輸もこの幹線道を走行していた。また，高祖九年（B.C. 198）「匈奴河南白羊，楼煩王，去长安近者七百里，輕騎一日一夜可以至秦中。」（『史記』劉敬列伝）との記述や，文帝十四年（B.C. 166）「匈奴单于十四万騎入…，使奇兵入回中宮，候騎至雍，甘泉。」（『史記』匈奴列伝）という記述もある。すなわち，匈奴の王が強大な軍勢を率いて漢王朝を攻め込んできた際，秦直道の便乗利用がしばしばあり，匈奴の偵察騎兵隊が北方辺境から漢帝都の中腹・甘泉宮まで迅速な侵入ができたのも，秦直道を利用したと考えられる。さらに，漢の宣帝時「呼韓邪单于款五原塞，願朝，三年正月，漢遣車騎都尉韓昌迎，発過所七郡二千騎，為陳道上。单于正月朝天子於甘泉宮。」（『史記』匈奴列伝）とあることから，匈奴单于は，遙々北方草原から前漢帝都の儀礼空間—甘泉宮へ漢の天子に謁見した際，まだ漢と匈奴の使節往来も皆，この直道を走行し「道上」での護衛や送迎が繰り返されていたことがわかる。

こうした帝国の道，北方国境線につながる軍事防御，異文化交流の道として重要な役割を果たした秦直道は，わずかな文献記述以外，その実態を探る手掛かりが乏しく，2000年来，幻のままであった。近年，考古学の調査と発掘が進み，秦直道の実像が徐々に甦ってきている〔黄曉芬・張2011，

黄2012〕。南北全長約750kmにわたる直道は，始皇帝時代に創建され，漢代に受け継がれ，後漢前期の廃棄まで300年以上利用され続けていたことが判明した。道路の構造については，南半の陝西省直道は，標高1300～1500mの山岳地帯に築造され，尾根沿いの作道が主流で，切土／盛土工法を用いて「塹山堙谷」（山を切り通して谷をうずめること）で平坦な道路が敷設されていた〔写真21〕。地形に応じた作道のために道幅が異なるが，平均30m（最大幅60m）である。版築技法によって路盤・路面・路肩・側溝が分段に構築されている。とくに大規模な車列が最短距離で進めるように，地形の許す限り南北方向にまっすぐに造り，ルート沿線には帝王高官ら専用の行宮が一定の距離を置いて造営され，また道路の整備・管理する亭障，関所，烽火台も要所ごとに築かれていた。一方，内蒙古オルドス市東勝区柴登郷城梁村には，幅30～50mの古道が見つかり〔写真22〕，その付近に存在する古城址を含む，幾つか秦直道の要素が見られるため，ルート北半における秦直道の代表例と見なされている。このオルドス東勝区城梁村の直道遺跡から北へ，黄河を渡って，南北一直線に延びると，陰山南麓の包頭市麻池古城につき当たる。秦直道の北端にあるこの麻池古城こそ，秦の九原郡，漢五原郡（県）の所在地だったと見るのが妥当であろう。

〔主要参考文献〕

- ・魏堅2006「河套歴史文化的考古学探索」『河套文化論集』内蒙古人民出版社
- ・黄曉芬・張在明2011「秦直道の研究」『日本考古学』第31号，2011.5
- ・黄曉芬2012「甦る、東洋最古のハイウエー」『東亜大学紀要』第15号、2012.1
- ・侯仁之・俞偉超1973「烏蘭布和沙漠的考古發現和地理環境的變遷」『考古』1973年2期
- ・辛德勇2005「陰山高関与陽山高関辯析—並論秦始皇万里長城西段走向以及長城之起源諸問題」『文史』2005年1期
- ・張海斌2000「高関，鷄鹿塞及相關問題的再考察」『内蒙古文物考古』2000年1期

- 張郁1997「漢朔方郡河外五城」『内蒙古文物考古』1997年2期
- 李逸友1992「内蒙古歷史考古学的發現与研究總述」『内蒙古社会科学』1992年2期
- 李紹欽1980「秦始皇与九原郡」『包頭史料薈要』第二輯，包頭市文物管理处·達茂旗文管所2000「包頭境内的戰国秦長城与古城」『内蒙古文物考古』2000年第1期